

プールサイド小景・静物

三潤野庄

新潮文庫





プールサイド小景・静物^{しょうけい せいぶつ}

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草139

昭和四十年二月二十八日 発行
昭和五十一年二月二十日 十六刷

著 者 庄^{しょう}野^の潤^{じゅん}三^{ぞう}

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

プールサイド小景・静物

庄 野 潤 三 著

新 潮 社 版

1671

目次

舞	踏		七		
プ	ール	サイド	小景		三九
相	客		六九		
五	人の	男		九一	
イ	タリア	風		一二五	
蟹				一六九	
静	物			一八九	

解説 山室 静

舞

踏

プ
ー
ル
サ
イ
ド
小
景
・
静
物

家庭の危機というものは、台所の天窓にへばりついている守宮やもりのようなものだ。それは何時からということなしに、そこにいる。その姿は不吉で油断がならない。しかし、それは恰も家屋の内部の調度品の一つであるかの如くそこにいるので、つい人々はその存在に馴れてしまう。それに、誰だっていやなものは見ないでいようとするものだ。

ここに、一つの家庭がある。

結婚してから五年たち、夫婦の間には三歳になる長女がある。市役所に出ている夫の俸給で、親子三人、か細く暮している。

夫は妻を愛し、妻も夫を愛しているが、それでも夫は一人きりの気楽な生活を夢想すること多く、妻はまたつねに故知らぬ孤独感に苦しんでいる。

夫の方は事情あって肉親と義絶の状態にある。妻は小さい時に両親を失い、彼女を育ててくれた祖母は結婚後に世を去った。天涯孤独の身である。夫は、もしも自分が電車にはねられて死にでもしたら、あと妻はいったいどうするだろうと考えてみることもある。しかし、いったい考え

てみたって何になるのだろうと思うから、この想像はいつでも中止されてしまう。

初夏の或る晩に、夫が帰宅して机の上を見ると、一枚の真白なレター・ペーパーが置かれてあった。妻の筆蹟である。

夜、あなたは、星がいっぱいきらめいている空をめがけて、真直に飛んで行ってしまわれる。あなたのマントがみるみる小さくなって、星の間に見えなくなってしまうまで、あたしは黙って見送っています。連れて行って！ とひと言、叫びたいのに、声が出ないの。ひろこ。

夫は読み終って、その手紙をくしゃくしゃにまるめ、そっと紙屑籠に入れた。そして、何事もなかったような表情で、彼の部屋を出た。夫は、最初の一行を見たとたんに、ぎくりとした。無論、思い当ることがないわけではない。

この妻には不思議なところがあって、何か大事がある時、彼女の予感が適中することがよくあった。最近、こんな事があった。女学校の時の親友で、結婚して山陰の方へ行っている友人が、突然この都市へ出て来た。ふだんは思い出したように手紙をやり取りするだけで、今度来ることにしても前触れがなかった。

ところが、その日、妻は朝からたまっていた洗濯物を一息に片付け、家の中の掃除をし、郵便局へ行く用事があったのを昼までに済ませてしまった。そしてその間というものの、心の中でずっ

と伴奏みたいにひとり言していた。

(さあ、これでいつTさんが来られても、心置きなくお話が出来るわ)

すると、昼過ぎに玄関で声が聞えた。彼女は飛んで出るなり、硝子戸の内側から声をかけた。
「Tさんでしょ。いらっしやい！」

戸を開けると、そこに旧友がにこやかに立っていた。友達の方では、自分が婚家を発つ前に出した手紙がもう着いているものと思っていたのである。その手紙は、次の日に着いた。そんなことを知っているの、夫はぎくりとしない訳にはゆかなかった。

夫には秘密があった。同じ課に勤めている十九の少女と恋をしている。役所が退けてから、こっそりと二人で映画を見に行ったり、夕暮の市街を散歩したりしていた。

夫は自分の心を見抜かれたことを知った。しかし、だからと云って、妻のこの手紙に対して、どういう風な言葉で答えればいいのかである。やぶ蛇、ということもあるのである。それに、おれはあの子が好きになっちゃったものを、妻のうつろな気持を知ったからと云って、どうにも思い返しようがないではないか。

恋をすることは難く、恋をして恋人の心を得ることはなお難い。それは千載に一遇と云うべきであろう。十九歳の美しく無垢な少女が、妻子あることを知って、しかも彼に心を寄せたのである。よろこびに酔うている彼に取って、どうしてこの恋を中途で止めることが出来よう。それにとこの家庭の妻だって、と夫は考える。永い結婚生活の間には、幾度かは夫の心が自分から離れたことに気付いて、ひどく淋しい思いを経験しないことはないというものだ。つまり、それを知

って諦めてゆくことが人生というものなんだ。お前はおれ一人を愛し、おれの為に献身する。そしておれもお前を愛している。それにも拘わらず恋人が出来てしまったのは、お前に不満があったからでもなく、お前に飽きて来たからでもない。偶然に、こうなってしまったのだ。それだからといって、もう妻の顔を見るのがうとましいということは無い。お前は私の変らぬよき妻であり、おれはお前を愛している。

——そのような自分勝手なことを並べた上で、夫は妻の必死の手紙を無視することに決め、夕食の部屋へ入った。

妻は何も云わなかった。ただいつもと同じように、彼の不在中に起った些細な出来事について語った。夫はそれをいいことにして、膝の上に坐った長女の相手になり、なるべく妻とまともに視線を合せることを避けながら、それこそ当り障りのないことをしゃべって、夕食を終った。

その夜、夫が眠ってしまふと、妻は自分の手紙がついに夫の心に届かなかったことを感じて、声を立てずに泣いた。かたわらには長女があどけない寝顔を見せて眠っていた。しかし彼女はひとりきりでいるのと少しも變りのない氣持だった。

祈るようにして書いた手紙。書きつぶし、書きあぐんで、止めようかと幾度も思い、やっとあれだけ書いたのだった。その手紙が、いま彼女の眼の前を、翼をもがれた小鳥となつてためらうように暗い海面へ落ちて行つた。

まるで魂を奪われた人のようにして帰つて来る夫を見ることが、妻に取っては淋しさを通り越

して苦痛となつて来た。こんなことは、結婚して以来一度もないことだった。時々ぼんやりして何を考へているのか見当がつかないという風なことだったら、これまでにだつてよくあつた。それはいわば夫の癖であつた。小学生の時分に、電車道を歩きながら魚のことを考へていた。停留所まで来て切符を買おうとしてお金を渡した。何処まで？ と聞かれて、さかな、と答へたことがある。大きくなつてから、それに似たことはしよつちゆうやつていた。妻に取つて、夫のそのようなどこか抜けたところのある性格はむしろ好ましいものであつた。隙のちつともない人間というのは、会つていて厭な氣がする。

ところが、今度は様子が全く違つていた。時々ぼんやりしているという程度ではなかつた。それは蟬の抜け殻のようにふわつとして頼りなく、妻を不安な氣持に陥れずには置かない態度であつた。たとえば、何か重大な秘密を知らされ、それを誰にも口外することが出来なくて、どうすることも出来ないでいる人間のように見えた。

「王様の耳」という外国の童話を、彼女は思い出すのだった。一人の若い理髪師が宮殿に呼び出され、王様の髪を刈ることを命ぜられる。さて王様の部屋へ一人だけ入つて、髪を刈ろうとして驚いた。冠を脱いだ王様の髪の間から、馬の耳が出て来たのである。王様の大変な秘密を知つてしまった理髪師は、それを一生涯、自分の胸の中に隠しておかなければならないことになる。一口でも人に話せば、生命はないものと脅かされたからである。その秘密を誰にもしやべることの出来ない苦しさに、彼は到頭病氣になつてしまふ。日に日に衰弱して行き、そのままでは死は免れることは出来ぬと思われた。家族の者が心配して、病氣の原因を知ろうとしても、理髪師は何

も語らなかつた。或る日のこと、彼はふらふらと家を出て、近くの森へ入って行った。そして一本の木の根に近く小さな空洞があるのを見つけ、そこへ口を持って行って、思い切り大きな声で「王様の耳は馬の耳」と三度どなった。秘密を木の中に封じこんだその日から、彼はみるみる元氣を取り戻した。……

妻は思うのだ。王様の耳は馬の耳。王様の耳は馬の耳。それがあたしに取ってどのようなに恐ろしい意味をもつ言葉であつたとしても、夫がそれを口に出してくれたらどんなに嬉しいだろう。もしもあたしがその声を聞いた為に、今度はあたしがその秘密を背負わなければならなくなつて、日に日に痩せて行つて、最後に死んでしまわなければならなくても、あたしは満足なのだ。夫が自分の秘密を口外することが出来なくて苦しんでいるのをじつと見ていなければならぬ苦痛にくらべれば、その方がどれだけ楽か知れない。

夫が懸命にあたしに隠そうとしていること、それがどんなことなのか、あたしには想像出来る。でも、どうしてそれをあたしに仰言つては下さらないのだろう。あれほど様子が變つてしまふくらい、好きな女の人が出来たのだつたら、どんなにか素晴らしいひとに違いない。あたしには、そんな氣がする。それなら、どうしてそのような人にめぐり会つたよろこびを、あたしに分けては下さらないのだろう。どうしてあんなに隠そう隠そうとなさるのだろう。あたしが氣付かないと思つていらつしやるのか知ら。それは、あの人に好きな人が出来たら、あたしは随分苦しい。だけど、あんな風にそのことを一口も云わずにいて、そのためにあの人がいづれもいつも自分を苦しめているのを見ていることの方が、ずっと苦しい。あたしがいることが、あの人をひどく不自

由にしているような気がして来るのだ。そして自分が夫を苦しめているように思われて、苦しい。

夜、ごはんを食べてから、夫はさっさと自分のお部屋へ入ってしまった。そして、それきり何の物音も聞えない。以前はあたしが途中でお茶をいれて持って行ったものだけど、それが此頃では、まるで眼に見えない糸が部屋の入口のところに張りめぐらされてでもあるかのように、ふすまに手を触れることが恐ろしい。幾度あたしは、お茶を載せたお盆を手にしたまま、階段の途中まで行って引き返したか知れない。或る時、「入ってもいい」と声をかけてから入口のふすまを開けたのだけど、あたしはあの人ひろげたままの便箋を急いで本の下に隠したのを見てしまった。あたしは気が付かなかった振りをして、無理に明るい声を出して云った。

「勉強ばかりするな、こらテ」

でもあたしは自分の顔がみじめに歪みそうになるのを、やっとのことで耐えた。それから、もうあの人の部屋へ入るのが、すっかり恐ろしくなった。夫の留守の時さえ、お掃除をしに部屋へ入る時は、机のあたりを見るのがこわかった。そこに昨夜の夫が坐っていた時の気配が残っているような気がして、もしも何か見てはならないものが眼に入ったらどうしようという不安があった。夜、あたしは下の茶の間で子供と遊んでいると、夫が引きこもっている部屋だけがひっそりと静まっっていて、そのことがあたしの頭から一分と離れたことがなく、次第に重荷になって来て、しまいにはもうこれ以上支え切れない気持になるのだった。

妻には子供があるという考えが、夫の心の中にあった。他に慰めを何一つ得ることがなく、し